

いたちかわらばん

通刊37号 鮠川・独川 / 川原番・瓦版 07 春号



【版画 宗森英夫】

さくら (ソメイヨシノ)

いたち川周辺の桜

桜は現在、日本全国で栽培品種も含めると一〇〇種を超える品種があります。いたち川周辺では、ソメイヨシノ（染井吉野）、ジュウガツザクラ（十月桜）、ヨコハマヒザクラ（横浜緋桜）、シヨウカワザクラ（莊川桜）、コヒガンザクラ（小彼岸桜）、オオシマザクラ（大島桜）、ヤマザクラ（山桜）、オオヤマザクラ（大山桜）、カンヒザクラ（寒緋桜）、シダレザクラ（枝垂桜）等十種類くらい桜を見ることが出来ます。それぞれ違った風情があり、開花時期も少しずつずれていますので、三月中旬から四月中旬まで、一ヶ月ぐらい桜が楽しめます。

しかし、多くの人が花見を楽しむのは、やはりソメイヨシノで、この桜が満開になると春爛漫といった感じになります。気象庁が開花予報を出すのも、この桜を基準にしています。あなたは、どんな桜が好きですか？いたち川周辺が最も華やかなのも、この季節です。例年、この季節になるとカメラやスケッチブックを持った人の姿が目立ちます。短冊を片手に吟行する人も見かけます。川岸の遊歩道（プロムナード）が整備され、夜桜を楽しむ人も増えています。

隅田川岸の桜並木を初め、川の土手に桜を植えている所がたくさんあります。横浜市内でも大岡川の蒔田公園から下流や柏尾川の戸塚駅から下流など多くの市民に楽しまれています。

全国には、桜の名所がたくさんあり、桜前線を追って各地に旅をする人も少なくありません。あなたは、毎年何箇所くらい訪れますか？

（いもり）

川への想いにかられた二人の男 ◆シンポジウム「もっと もっともっと！いたち川」開催報告◆

機械化する農業で消滅する自然の小川

2月24日、いたち川をテーマにしたシンポジウムが栄区役所主催で開催された。栄区のシンボルリバー「いたち川」と水辺の環境をもっと活用して、もっと魅力的な街づくりをしたいとの思いから企画されたものだ。

子どもの頃田舎の小川や田んぼで夢中になってフナやドジョウ、ヤゴ、ゲンゴロウなどを手網ですくって遊んだ記憶のある方も少なくないはず。稲作文化の日本では小川は、田んぼに水を引くための重要な用水路の役目をしていたので、田植えの時期には小川をせき止め水を貯えて田んぼに流したり、放流するための用水路であったり、多機能な用途に使われていた。せき止められた小川には、大きなフナやウナギも多くいて競って取った。農耕機械が普及していない時期だったので農家では農耕用に牛や馬が飼われていて、あぜ道も水路でも農道も土で造られ、土を盛ったあぜ道や土手には草が生え、そこには昆虫がいて、カエルがいてヘビがいた。農耕機械が普及した今日の農村では、水路もあぜ道もコンクリートで造られ、農道も舗装され、フナやドジョウ、ヤゴ、ゲンゴロウなどの住みかはなくなってしまった。

地方で見ることが出来なくなった本来の自然を、都会の片隅で復元させることを夢を見て、実現への情熱を傾けている二人の男がいる。二人に共通したものは、子どもの頃に楽しく遊んだ水辺への郷愁か、子ども心を持つファールに似た強烈な興味なのか、定かではないが頼もしい二人である。

多摩川で子どもと遊ぶ、川遊びの達人

その一人は、映画「釣りバカ日誌」のなかで主人公ハマちゃんの友人で、釣り船の船長さん役の中本賢さん。川崎の多摩川縁に住み、子どもとの散歩を契機に多摩川の魅力に取り憑かれ、現在では地域の小学校で大勢の子どもに川遊びを指導している。彼によれば、川のビニールゴミもコイの産卵場。観察活動も、川のなかの魚類から土手の草花、野鳥生活の研究までと幅広い。地域の多くの小学校に赴き子どもに川遊びを指導している。指導というより子供心になって一緒に遊んであげているという方がよいか。多摩川をフィールドに子どもを引き連れて川遊びをしているそうだ。学校の先生も、子どもの母親もはじめは警戒していたようだが、最近では中本さん

のファンになり、共に川遊びをされているという。

一人の夢が世界を変える

もう一人は、栄土木事務所に勤務した20数年間、いたち川再整備に取り組んできた栄区のシンボルリバーの生みの親とも言える和久井さんだ。いたち川の話をする時には必ずと言っていいほど和久井さんの名前が出る。今回のシンポジウムで彼の足跡を知り、彼のいたち川に対する一途な情熱を知ることができた。地域住民の無関心のなかで忍耐強く河川の自然工法を説得し続けた信念には敬服してやまない。栄土木から離れた現在でも、「いたち川 OTASUKE 隊」隊員としてボランティアで栄区内の小学生をいたち川に案内し指導を行っている。

ゆっくり長時間かけて海に注ぐヨーロッパのテムズ、セーヌ川などに比べると、日本の川は急流で、雨期と台風時期に雨が集中して大量に降る関係から河川工法は本来治水を第一に考え、景観、親水要素はなおざりにされる傾向があった。降った雨を速やかに海に流すショートカット方法が近年まで日本の基本方針だった。この方法だとどうしてもコンクリートで囲んだ堤防、河川敷は流れを邪魔しない何もない広場という乏しい景観にならざるを得なかった。このタブーに挑戦したのが和久井さんだ。彼のとりいれた工法は、治水を考慮に入れながら、自然の流れを取り戻す方法である。洪水時には川幅いっぱい水が流れ、平常は緩やかに蛇行する流れだ。この工法そのものの妥当性よりも、この方法を都会の片隅でいち早く実現させた彼の先見性・慧眼に深く感謝している。彼の決断がなかったら、今を誇るいたち川も横浜の大岡川や鎌倉の滑川と同様にコンクリート堤で囲われた川であったであろうと思う。

いたち川をモデルにしようと栄区役所を訪れる河川関係者は、今年度韓国をはじめとして東南アジア各国や国内地方都市から千人を超したという。一人の男の夢と信念が世界を動かしている。都会の隅っここの片田舎から世界を動かせる環境保全のモデルを発信できるなんて実に素晴らしいことだと思う。

（谷 溪）

発行年月
2007年3月

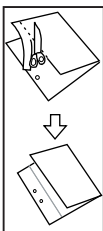
通刊37号

発行：独川OTASUKE隊（いたちがわおたすけたい）

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係

栄土木事務所下水道・公園係

〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260
〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）



【いたち川水源探査 - 4 いたち川の分水嶺を歩く】

東北方面（港南区境）～東方面 （磯子区、金沢区境）～鎌倉へ

本誌34、35、36号での【いたち川水源】探査報告に引き続き、いたち川流域の「分水界」・「分水嶺」を探査した。今回は、いたち川右支川の東北方面（港南区境）から水源となる横浜自然観察の森の東方面（磯子区、金沢区境）を一部南方面（鎌倉市境）の分水嶺に沿って探査しながら、鎌倉市に入り滑川水域を散策した。

2006年11月4日（土）午前9時、栄区役所裏の大いたち橋に集合した6名（OTASUKE 隊員4名と一般参加2名）は、大いたち橋からいたち川右支川に沿って本郷石橋に出て、鎌倉街道を、環状3号線と交差する原乃橋東へと向かった。栄区から中区を結ぶ鎌倉街道が先月全面開通し七曲の所のポケットパークには真鶴産の小松石で作られた完成記念碑に開通日が刻まれていた。広くなった七曲からは旧街道の細い道が下に続いているのが望まれる。原乃橋東からは環状3号線に沿ってすっかり色づいたユリノキの街路樹の下を、舞岡上郷線と交差する港南台5丁目交差点まで向かった。3号線のこのあたりは、相模湾に流入するいたち川（⇒柏尾川⇒境川⇒江ノ島）と東京湾に流入する日野川（⇒大岡川⇒みなとみらいの自動車道下を通り横浜港）流域の分水界にほぼ近く、環状3号線は日野川流域に入るが30m程栄区側に立っている高圧送電線・鉄塔あたりが分水界であろう。港南台5丁目交差点から100m程で港南区界の分水嶺にはいる。そこから500m程、港南区側は開発で切り取られ急激な崖となっているが笹下川（⇒大岡川⇒横浜港）との分水嶺となる。

道場丸広場から瀬上池に降りる道を右にみて200mほど過ぎると栄区・港南区・磯子区の3区分岐点となりちょっと開けていて、瀬上池が一望できる。瀬上池を眺めると白くもやが立っている。このあたりからは富士山を眺めることができるのだが今日は少しもやっていて残念であった。近くには海上保安本部通信事務所があり、ここを過ぎると道の両側とも山となり分水嶺らしい雰囲気になってきた。ここからは磯子区の氷取沢川（⇒

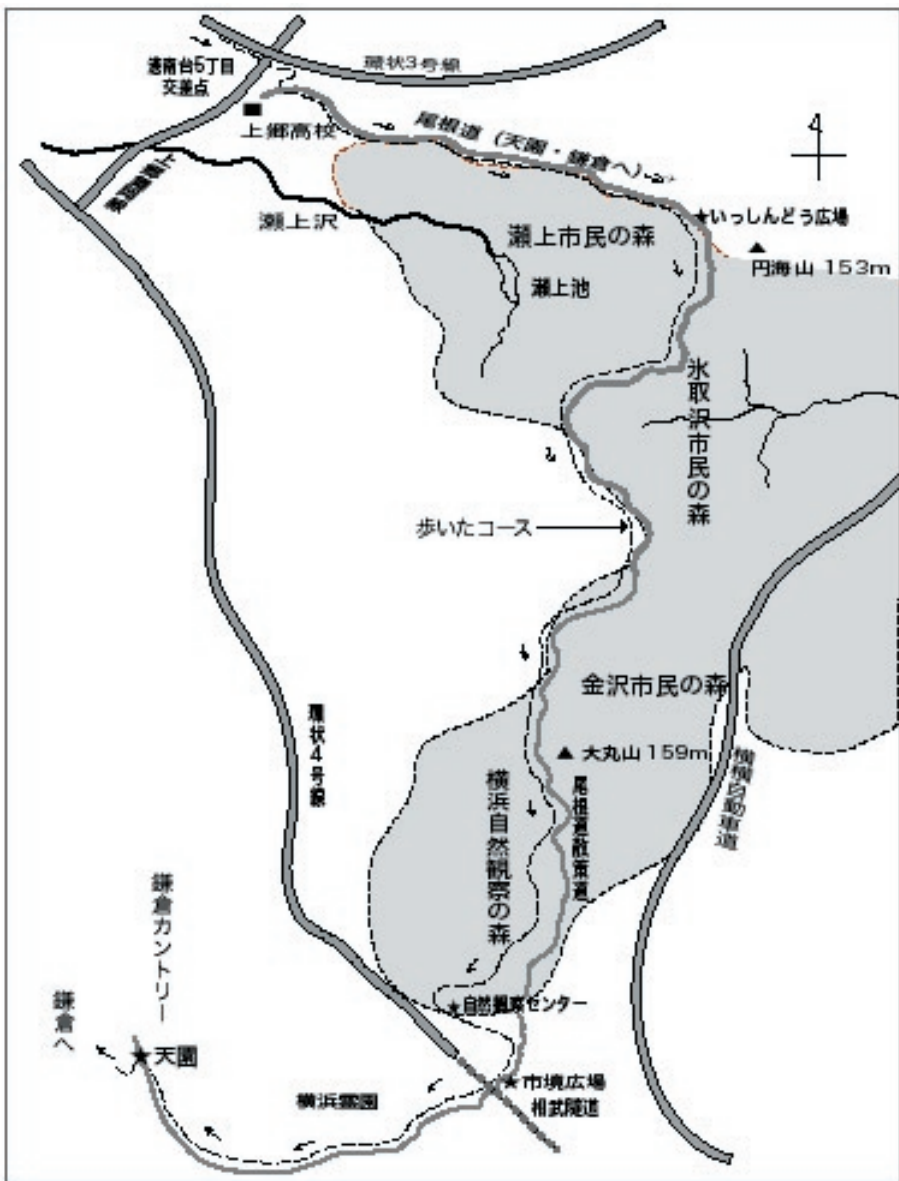
大岡川⇒横浜港）との分水嶺となる。200mほど行くとやがていっしんどう広場に到着した。

ここから左に300mほど行くとNTT無線中継所のある円海山頂上である。道を南にとり梅沢山休憩所を過ぎて200mほど行くとそこからは、金沢区との区境となる。やがて大丸山の下をとおり横浜自然観察の森に立ち寄った。自然観察センターには各種の動植物の展示がされており、体長30cmくらいの雄のイタチの剥製も展示されていた。イタチは夜行性で人目にふれることは少ないが、ミズキの池の観察小屋あたりでは運がよければ出会えることもあるそうだ。再び自然観察センターの裏から分水嶺の尾根道にもどり200mほど南下して市境広場に到着した。このあたりの下はちょうど環状4号線の相武隧道トンネルが通っている。

ここからは鎌倉市と横浜市栄区との市境となり道は西方向へ天園に向う。道の南側は太刀洗川や吉沢川など滑川水域との分水嶺となる。横浜霊園のお墓を右に見ながら進むとやがて天園に到着した。ここでビールでのどを潤し、ちょっと遅い昼食をとった。3連休の中日で大勢の人で賑っていた。ここでいたち川分水嶺探査は終了して滑川水域の散策のため、天台山から瑞泉寺方面へ天園ハイキングコースを南下した。瑞泉寺を過ぎ、通玄橋から二階堂川沿いを歩く。この川もきれいで歌の橋で滑川に合流する。滑川は太刀洗川や吉沢川や二階堂川などを集め鎌倉若宮大路沿いに材木座海岸に流入しているが、水の浄化が進み、十二所神社あたりまで鮎が溯上しているとのことである。鎌倉市の表玄関を流れる滑川に鮎が溯上することはうれしいかぎりではあるが一方、鎌倉市の裏側、栄区の新橋で鎌倉側からいたち川に流入する通称“どぶ川”の方は下水処理場がでず、いまだに“どぶ川”のままである。いたち川の水も柏尾川に流入し、柏尾川は栄区⇒鎌倉市⇒藤沢市と流れ、藤沢市で境川に流入して江ノ島の片瀬にて海に流入する。滑川の流入する材木座海岸とは、直線距離で6kmとはなれていない同じ相模湾である。鎌倉市には裏側にも気配りをお願いしたいものである。

今回の探査行は前日夜遅く雨が降り、当日はうす曇の暑くもなく寒くも無いと言った絶好の日和であった。コースは幾度と無く歩いてきた道はあるが、相模の国の相模湾と武蔵の国の東京湾との分水嶺を歩いているんだと味わいながら歩くとまた違った趣があり、秋の一日、栄区に残された

豊かな自然を満喫できた。いたち川は、豊かな自然を流域に持つ素晴らしい川だとの認識を強くした分水嶺探査行であった。上郷高校下も開発が計画されているが、できうる限り今の姿で次の世代に残したいものである。（YF 記）



リレイト1997 32

十周年を迎えた荒井沢市民の森

荒井沢市民の森は、今年、開園十周年を迎えます。私は当初から役員を務めてまいりましたが、他にも役職をいくつか持っていたのでなかなか作業に参加できず、心苦しかったのですが、最近は何に余裕ができて、定例作業に加わることが以前より多くなりました。

作業開始前に体操をしますが、このときは気分爽快になります。青空の下ならなおさらです。作業は自分の年齢とその日の体調に合わせて選んでいます。出来ることは積極的にやる、無理はしないをモットーに。

緑に包まれて体を動かし、お昼時の歓談で心満たされ、帰宅したときに残る軽い疲れはむしろ爽やかで、充実感さえ覚えます。これは労働だけから来るものでなく、仲間との共同作業や交流があるからこそ起こる気持ちではないかと思っています。

これから絶好の季節を迎えます。緑のエキスを全身に浴びながら体を動かしましょう。（荒井沢市民の森愛護会 本間 陽）

イタチとは？



イタチは、タヌキ科の動物。日本全国に広く分布しており、頭胴32.5（雌20.0）ミリ内外、尾14.5（雌8.0）ミリ内外、頭骨全長5.5（雌4.0）ミリくらい。歯数34個。冬毛は赤褐色に黄みを帯び、夏毛は色濃くチョコレート色となる。吻端が白くこれに接する前額、眼先および眼眼部は暗褐色である。

夜行性でかつ昼間も活動し、遊泳・潜水が巧みで人家に入り家鼠を捕らえる。野鼠・蛙・昆虫・池魚・家禽・鳥卵等を食う。2、3月に交尾、4、6月に一産、1〜7仔を産む。「原色動物大図鑑から抜粋」

小さくても獰猛な殺し屋で気が荒い。肛門近くに特殊な腺があり強敵に追われたりすると悪臭の液を射出して身を守る。俗に言う「イタチの最後尻」であり、窮して最後の手段に訴えることに転じて使われる。

さて、諺に「トラは死して皮を残す」というのがあるが、イタチは死してどうなるのだろうか？

四国の四十川には「イタチ漁」と呼ばれる漁法がある。これは十二月下旬から二月の間、ウグイがこもっていきそうな岩に網を巻き、イタチの皮を竿の先に付けて穴に差し込むと、イタチの臭いを嫌ったウグイが穴から出て網にかかるというものだ。トラの皮は殿様が腰を下すのに使われる程度だが、イタチの皮は漁具として使われて漁師の生計を立て、獲れた魚は庶民の食卓を飾る訳だから、イタチはトラよりも遥かに価値のある動物だと言えないだろうか。（ピントール）